

—ただキリストと共に歩む—

# 水戸無教會

編 集 半 田 梅 雄  
第 十 一 号

ただ一つのもの

半田梅雄

一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」(ルカ一〇章三八節、四二節)

ように一途に、熱心に、単刀直入に福音にのみ聞き入るべきだということである。然し最近になって、私は、この記事の底知れない深さに益々怖れと驚きとを覚える。イエスはマリヤの態度をほめておられるが、それは決して、接待より講義を聞く方がよいと、安易に比較的なもの言いをしているのではない。同様にマルタに對しても、接待など無用なことだ、こゝで聞いていないさいとは言っていないのである。イエスは、なくてはならぬものはたゞ一つだけだと言われる。即ちその一つを除けば、あとに山のような善行を積んでも、何の役にも立たないという、福音の根本義を、その場の事実にてらして単純明快に指摘されたのである。実に心憎

いまでに鮮かな表現である。最初にイエスを家に招じ入れたのはマルタであり、接待のことで転倒する程気を使ったのもマルタである。してみるとマルタは実に積極的で、親切な、そしてイエスに對する敬慕も一通り以上のものを持つていたことがわかる。然し本當に大切なものを知らないで、どんなに熱心に真心を傾けて親切を盡しても、恐ろしいことだが、それはやはり滅びにゆく。「マルタよ」「マルタよ」と二度呼びかけたイエスの眼が、どんなにマルタに對する愛に溢れていたか。更に「マリヤは良い方を選んだのだ。そしてそれは彼女から取り去ってはならないものである。」と仰言る言には、やさしいが、実に凜として犯すことの出来ない義の厳しさが感じられる。まさに神の子にして始めて可能な權威に満ちた言である。

# 聖靈降臨

―使徒行伝研究(六)―

半田梅雄

## 二ノ一〜四

第一章で学んだ通り、聖靈は遂に下った。即ち一章五節に於てイエスが約束し、命じたことは第一に果されるのである。これについて我々は次のことを学ぶことが出来る。

1、イエスの約束は違わなかったことである。

2、弟子たちは又このイエスの約束と命令に対して少しも疑うことなく、只管祈り待っていたのである。

(一ノ一四)

3、かつては信じなかったイエスの肉親(ヨハネ七ノ五)もイエスの復活をみてエルサレムに來り加わつ

て、心を一つにしていのりつとめていた。

4、かくて準備は全く成つた。彼らが一つ処に集まつて居つた時に聖靈は降るのである。

愈々聖靈は降る。世界は遂に天国復帰の活動を開始するのである。アダムとエバによつて樂園を追放された人類に、独子を賜う愛(ヨハネ三の一六)によつて十二分な準備をなし、こゝに一人一人の魂をして天国に籍を移さすべく、遂に神は靈をもつて臨み給うのである。「聖靈降臨(ペントコステ)」、これこそ人類史が天国と直接交渉を持つ発端であり、その意義

は眞にはかり難い深さを持つものと云わなければならぬ。

ルカによつて述べられたその場の光景は、わずか五、六行、二八〇〇字位に過ぎないが、その簡にして要を得た報告は、眼の当り見るような心持がする。先ず、烈しき風の吹き來たることき響きである。これにわかに天より起つた。そして彼らの一しよに集まつている部屋一ぱいに満ちた。勿論それは風ではない、「吹ききたる風の如き」である。激しき風のような響きである。彼らは、すわとばかりに緊張した。ぶるぶると身の震えるような畏怖と敬虔である。と同時に火のようなものが分裂して舌が現われ、各人の頭上より魂に入りて止まるのである。まさしく火による洗礼(バ

プテスマ)である。それは単なる火ではない。神御自身のなし給う聖靈のバプテスマである。彼らは一大音響によつて、先ず我に頼る力を失つた。今こゝに突然地震がガンと來たことを想像してみるとよい。誰しもあつと息を呑むに違いない。金を数えているものも、字を書いている者も、一ぺんにペンを放りだし、金を投げ出すであろう。そして次の瞬間、彼らは恐怖のどん底に叩きのめされるであろう。それは何の準備も為されていない場合、一層甚しいに違いない。

弟子たちも勿論驚き畏れたであろう。然し、彼らは意識するとしなに關わらず、父の足音を知るのである。あたかも自意識なき子供が、父母の声を聞きよるこびの声を上げるように、

彼らは我を失った。自我はこゝに一ぺんに消し飛んだ。残されたものは、イエスの約束を信じ、ひたすら祈り求めてきた魂の希求だけである。かくして聖霊の火はこの世の虚栄を焼き潔め、魂を全く別なハガネに作り変えてしまうのである。

さて聖霊に満たされた彼らの行動は？「御霊の宣べしむるまゝに、外国語を語り始める」(二ノ四)のである。

人は往々にしてこのような記事につまづき、聖書を棄て去ることが屢々ある。我々は素直にこれを信ずる。唯信じ難い人々に一つの例を用いることは許されよう。

先ず「聖霊が降る」ということについて、これと同一の方法ではないが、聖霊

そのものがこの小さき私にも臨み、今日の私を支えているという、この事實は絶対に偽りと為すことが出来ない。然も我々は一九〇〇年後の今日に於て、日本語をもつてこのことを証して倦むことがないのである。支那語然り、朝鮮語然り、英語、独、伊、佛語然りである。トルストイとドストエフスキーの露語又同様である。この広い全世界に、数十の国語をもつて、今日只今我々とおなじ証しをしている人々は恐らく億を越えるであろう。然も我々クリスチャンは、福音に対する信仰のみによつて相会う時、民族と国境を越えてそこに兄弟を発見することが出来るのである。例え聖霊降臨(ペンテコステ)を荒唐むけいと笑うことは出来ても、二十世紀現在のこの

事實を否定することは何人にも出来ない筈である。

然らば、その原動力は何か？それは一つにイエスの十字架と復活によつて準備され、聖霊によつてつながることの出来た神の力、神の恵みに外ならないのである。

## 来 信

東 京 S 兄

前略、此の度は永らくの望みがかなえられました。誠に感謝で御座いました。この訪問によつて、私はいろいろのことを実感として覚え、信仰を強められました。特に教えられました二三を列挙しておきます。

一、福音だけを求めて交る教友のコイノニヤの如何に清らかであるかということ  
(丸の内の報告など申し上げるいとまもない程、打たれました)

一、神の御計画の厳かに進められているということ。

(一年半の間に数人の教友が加えられていること。特に教会にて求めるところを得られない人々が)

一、水戸無教会の発足が決して偶然でなかつたこと。

(発足当時を現地に省みて、当時の信仰の先輩の伝道が相次いで行われたこと、それを受ける熱意に満たされていたこと)

まだ沢山のことを感じました。然し本質的には煎じつめれば神の恩恵はこの様にして、東京にも、水戸にも、日本中に、全世界に、宇宙のすべてにこの世にもあの世にも満ちあふれているのだということを教えられたことになりました。では、いずれ又。

## 子供の世界

動物の集団にも整然とした秩序がある事、そしてその秩序は種族保護の本能による事を我々は知っているが、それは現象としては優者支配の形態をとる。従つて一つの集団の中に新しい優者が出現する時は、古い優者との間に生命を賭ける猛烈な権力の座の争奪が行われる。然し一度勝負が決してしまつた後は、敗者は勝者に対して徹底的に服従する。かくて、その集団は依然として強力な単一の支配者によつて指揮を受ける。子供の世界にもしばしばこのような優者支配の形式が存在するらしい。しばらく前のある午前、数人

の入学前の子供達が柵の内側の空地で遊んでいる所に通りかゝつた。間もなく、彼等の一人が柵の切れ目を通つて通路に出ようとした所、今一人の子が先の子を急いで引き戻し、先ず自分が先に通り抜けてしまい、そのあとから残された子供達が続いて外の方へ出て来たのであつた。別に珍しい事ではないが、此の状景を見た時に、幼い子供達の世界にも暗黙の秩序があり、優者とその秩序を維持する為には実力をも行使するのだという事実気付いたのである。

動物の世界も、子供の世界も、何よりも力が優越す

るといふ点で共通したものを認める事が出来る。強い物が支配し、弱い者は之に服従する丈である。所で大人の世界はどうであろうか。彼等は大人として行動しているであろうか。少くとも現在の世界の大国の指導者達の行動は結局此の子供達の遊びと大差がないのではないか。彼らは互に他

に対してより強力になる事によつて優位に立ち、支配的であろうとする為に凡ゆる努力を払つているとしか思えない。勿論十九世紀流の「力は正義なり」を誰もむきだしに主張することはしない。しかし平和や正義の仮面にかくれ、合理性に粧われている力に対する信頼を依然として失わない。そして此のような態度を棄てる事が出来ない限り、たとひ世界の支配勢力が甲

から乙に移ろうと、決して眞の正義と平和とが支配する世界は到来する事がないであろう。

「しかし、あなた方の間では、そうであつてはならない。かえつて、あなた方の間で偉くなりたいたいと思う者は、仕える人となり、かしらになりたいたいと思う者は、凡ての人の僕とならねばならない。」(マルコー・四四) 此のイエスの己の生涯をかけて明かにし給うた新しい世界の原理が人々によつて心よりの感動をもつて受け入れられる時に、人と人との間に義と平和との秩序が回復され、世界は恐怖からの自由を克ちとる事が出来るであろう。(石原秀志)

## 教会の世俗化

### 松本文助

最近のキリスト教新聞でブルンナーの忠告と云う見出しで、「博士が渡米した

時、日本教会は世俗化し、希望は無教会の人々にのみあるという意味の講演を行い、クリスチャン・センチュリー誌三月二日十六号に報道された。博士が言う如く日本教会は全く世俗化してしまつたとは言ひ切れないが、教職の排他性を始めとして聞くべきものが多くあつたようである。」と云う記事があつたが、「教会の世俗化」は誠に尤つともであるとおもつた。今や新教々は、その教勢と云うその挽回の名の下に人力や金力や組織力によるも

のとして益々世俗化しつゝあることを知らないものゝ如くである。

然るにイエスの降誕と其の歴史の事實は私共に何を示し、何を教えているのだろうか。二千年前ローマ帝国はまさに黄金時代であつて、その王宮に君臨したカイザル、アウグストとその属国であつたユダヤ、そしてベツレヘムの客舎、馬槽の内に呱呱の声をあげたイエス・キリストとは、星移り時変つた廿世紀の今日其の地位は全く転倒した。天地雲壤の差とはけだしこの事である。王宮と馬小屋、皇帝と大工というこの世的なものではどうすることも

出来ないのである。勝負は既にそのときに決定されて

いたのである。それはイエスは神の仔であり、アウグストは人の子である。神の力と人の力であつて角力になる道理がないからであつた。また今から四百年前「義人は信仰によりて生くべし」（ロマ書一の一七）

の言に新生されたルーテルは当時の世界の大力であつたローマ天主教会を脱し独り之に對し戦を挑んだのであつたが、それは赤坊と力道山との相違であつた。然しルーテルの新教に依つた国は興り、ローマ天主教会に依つた国は衰頽してしまつた歴史の事實は如何ともすることが出来ない。これは信仰に依る神の

力と形式化してしまつた人の力の相違である。

若し新教々会がカトリック化し、儀式や会堂や、信仰箇條や、神学や、資格やを問題にして、その開祖であるルーテルの「信仰のみ」の單純なる信仰に立還ることが出来ないならばと塩氣を失つた塩の如き存在と化す何物でもないのである。「四十六年を経て建てたるエルサレムの宮をこぼちて三日間に之を起す」（ヨハネ二ノ一九―二一）イエスの言を憶い出すべきである。

#### 日曜集会

毎日曜午前十一時より

場所 水戸幼稚園

講義 マタイ伝研究 石原

午後 ギリシャ語研究

サタンの主張と陰謀(口)

「ヨブ」研究(一)(五)

大森孝夫

一章九節「ヨブあにもとむることなくして神を畏れんや・・・汝の手を伸べて彼の一切の所有物を撃ちたまへ、然らば必ず汝の面にむかひて汝を詛はん」このサタンの痛烈、骨を刺す鋭い批判を私たちは深く考えねばなりません。何故なら今日の大部分の日本人の宗教心というものはサタンの指摘の通りだからです。「苦しい時の神頼み」という諺がある通り日本人の多くは病氣治療、商売繁盛、家内安全ということの為に宗教心を起します。そして偶像崇拜に狂奔します。この点を悪巧みに捕えたものが非道な最近の新興宗教です。利益のために信心するという低劣な日本人の宗教心は、どしどしと数年にして資産数億という新興宗教を作り上げています。この新興宗教の大繁盛にあつてふためいているのが現在の神社やお寺です。彼らも何とかしてこの日本人の宗教心を利用してあらゆ

る手段を弄しているのです。(気の毒な彌彦神社の犠牲者たちよ。)凡そ禮拜堂を有し組織された団体を有する宗教にはどうしても財力が必要なようになります。そしてその結果は霊的なものが墮落し人々の安易、低劣な宗教心に媚びるものとなります。然し眞の唯一なる神を拝し霊的な団体であるキリストの教会は教会員製造、教会員獲得などの術策を弄することは決してないと思います。もともとキリスト教は制度、組織化された所謂宗教ではありません。純粹なる宗教、信仰心は物質的報酬を期待しません。不純なる物質欲は純にして靈的な宗教心を汚すものであり、かゝる欲を一片だにもつ者は神の国に入ることはできません。(その例はマルコ一〇・二三〜二五)よつて明白であります)エホバは一章八節の如くサタンに向つてヨブをほめておられます。サタンも一応ヨブの義を認めています。彼にはヨブの敬虔はエゴイズムであるとしか考えられません。功利主義から離れ霊と眞実を以て

神を畏れるということはサタンや無神論者には判りません。十字架につけられしイエスや、イエスに従つたパウロの地上における生涯など彼らにとつては呆れはてた馬鹿げたことなのです。九節のサタンの言葉は表面上はヨブを誹つておりますが、実はエホバに對する侮蔑の言葉でもあるのです。よく読んで下さい。私はこの節を学ぶにあつて恐れます。サタンはこの私を指して神に侮辱の言を吐いていないでしょうか。私は神に感謝するといつて自分を誇り、世の何ものかを求め、神の栄光を汚してはいないでしょうか。「口で立派なことを云つていても、すべを献げ眞に神を拜せざる人間があそこにもいるではないか。神は利用されて聞こえます。」サタンの声を聞こえます。私は懼れを以て心からイエスの御名により祈ります。神さま、信仰なき私を許し給え」と。

後記

○後ればせながら本年も第一号を発行出来たことを感謝したい。取るにも足らぬこんな小さな雑誌が、一体何の役に立つのかと思つて、情けないような氣もしいではないが、愚は愚なり、小は小なりに用い給う神様の寛容と愛を信じて今年も頑張つてゆきたい。

○立春もはや過ぎた。季節は急速に春へ向かつて行進を始める。草木は既に目覚む。

昭和三十一年一月 発行  
水戸無教会第十一号

実費十円千共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会